

MALAYSIA マレーシア

マレーシアはかつてイギリスの植民地であり、現在も英連邦加盟国のひとつということもあり、英語教育のレベルは非常に高く、一般市民も第二外国語ながら流暢な英語を話す。最近では大学など高等教育機関に入るための英語学校も充実。世界中から留学生が集まっている。しかし、日本ではまだまだ語学留学先としての認知度は低いのが現状だ。学習システム、環境、レベルなど気になることは多い。クアラルンプールの大学を回って、日本マーケットの可能性を探ってみた。

【取材協力=マレーシア政府観光局/日本航空 取材・文=山田友樹】

マレーシア短期留学のススメ 想像以上の英語研修の実力、 安いコストも大きな魅力

留学生受け入れに積極的なマレーシア

「マレーシアは、留学生の受け入れにおいて世界で最も早い成長を遂げている国」——そう話すのはマレーシア高等教育省エデュケーション・オブ・マレーシア・ディレクターのサイド・アルウィー氏。全国の高等教育機関で学ぶ学生は現在およそ100万人、そのうち約10%が海外からの留学生だという。マレーシアでは教育を基幹産業に育てる政策を掲げ、留学生を積極的に受け入れており、2020年までに、その数を20万人まで増やしていく計画だ。

「マレーシアは多文化の国。教育にも多様性がある」とアルウィー氏。多様だからこそ、授業はすべて英語で行われ、英語による授業だからこそ、世界中から留学生が集まる。単位も欧米の大学同様に大学間で交換できるシステムを採用しているという。

加えて、「学費や生活費など留学にかかるコストが他国と比べて安いことも大きなメリット」と強調する。たとえば、マレーシアの公立大学の学費は年間約3,000米ドル、私立の場合は年間約6,000米ドル。これは、欧米のいわゆる留学先進国と言われるアメリカ(公立)、英国、オーストラリア、カナダ、そしてシンガポールと比べても公立で5分の1から6分の1ほどの学費になる。また、マレーシアの年間生活費は約5,000米ドル。これも、欧米やシンガポールと比較すると、2分の1から3分の1に抑えることが可能だ。

アルウィー氏の説明は大学などの高等教育機関の事情について。しかし、大学のキャンパス内にある語学学校でも状況は同じだ。さまざまな文化背景を持つ学生が集うキャンパスでは英語が共通語。生活費や学費が安いと、同じ予算でもマレーシアなら欧米よりも長く留学することができるというわけだ。

国立も私立も柔軟にプログラム設定

現在、マレーシアには国立大学20校、私立大学48校がある。マレーシア政府は高等教育の拡充を進めており、カレッジを含めた民間の高等教育機関の数は600校を超えている。

マレーシア国民大学(UKM)は、国立大学のなかでも積極的に留学生を受け入れている高等教育機関だ。短期留学生向けには1~4週間のホリデー・プログラムを提供。英語やマレー語の語学研修、マレーシアの歴史文化やライフスタイルを学ぶコースを設けているほか、ホームステイやシティツアーなどのアレンジにも応じている。

一方、私立大学でもそれぞれ独自の語学研

修プログラムを提供し、留学生の受け入れを積極的に進めている。クアラルンプールの中心から車で15分ほどのところにあるUCSI大学では、「The Language Institute」を設置。英語はもちろんのこと、マレー語、中国語、韓国語、日本語、フランス語、アラビア語などの外国語プログラムを提供しており、そのうち英語については、初級から上級まで細かく学習レベルを分けた「英語強化プログラム」のほか、大学進学を目的とした「TOEFL準備プログラム」も設けている。

およそ2,500人の留学生が学んでいるHELP大学でも、非英語圏の国からの学生向けに英語研修コースを設定。大学入学に必要な英語力を身につける「集中英語コース」のほか、夏休みを利用して英語を学ぶ「英語サマーコース」も人気だという。

日本人学生も学ぶ英語集中プログラム

アジア太平洋大学(APU)とクアラルンプール・インフラストラクチャー・ユニバーシティ・カレッジ(KLIUC)は、日本からの語学研修生受け入れに実績のある大学だ。今夏、APUには群馬県等の助成を受けた群馬県立女子大学と高崎経済大学の学生を含め24名の日本人学生が1ヶ月間の英語の授業を受け、一方、KLIUCではマレーシア政府観光局が主催する「ルックマレーシアプログラム」に参加した16人を受け入れた。

APUの集中英語プログラムは、これまでに90カ国から5,000人以上の学生が参加した実績がある。基本は初級から上級まで7つのレベルに分かれた4週間のコース。大学入学のための準備のほか、スピーキング、リーディング、ライティング、リスニングの英語力を向上させることを目的とするコースもある。宿泊費も含めた1ヶ月のパッケージ料金は1,300米ドル。このほか、2.5ヶ月コースや4ヶ月コースも提供している。

一方、KLIUCでも中国語、アラビア語、日本語とともに英語についても集中プログラムを提供。1クラス最大25人で、教師の数は基本的に20人。主に、ビジネスで使えるコーポレート・コ

ミュニケーションに主眼をおいたスキル向上を目指しているという。このほか、大学入学に必要な英語力を証明するIELTS取得のコースも設定している。



世界にネットワークを持ち、日本でも馴染みのあるELSLランゲージ・センター。クアラルンプールでもUPMに併設している。主なコースは、IELTS準備プログラム、TOEFL準備プログラム、認定集中英語プログラム(CIEP)。そのうち、CIEPは初級から上級まで10レベルに分かれ、4週間で1レベルを修了するようにプログラムされている。1クラスは最大20人。先生の目が行き届く環境を整えている。

日本でも認知度の高いELSLも

英語学習に加えて、夏休みや冬休みを利用してマレーシアの文化を学ぶホリデー・プログラムのアレンジも可能。ニーズに合わせたテーラーメイド対応もできるという。クアラルンプールではUPMのほかKLCCやプキップンタンなど5カ所に教室を構えている。

実際に現地に短期留学している日本人大学生に話を聞くと、英語力の向上を実感しているとともに、異文化での生活に日本では得られない刺激を受けているようだ。

APUで学んでいる群馬県立女子大学と高崎経済大学の大学生は夏休みを利用して1ヶ月間の短期語学研修だが、「刺激的な体験をしている」「コミュニケーション能力の上達が就職にも役立つと思う」「ここで学んでいると、海外で働くというイメージが湧いてきた」など、それぞれに効果を実感している。

英語力アップとともに世界観の広がりを実感

また、ある男子学生は「韓国の学生と竹島問題について話した。メディアでは伝えていない生の声が聞けて、視野が広がったように思う」とのエピソードを披露。英語学習だけでなく、さまざまな文化を持つ学生との交流でも貴重な体験をしている。

一方、ルックマレーシアプログラムで選ばれ、マレーシアでさまざまな体験をしている16人も、約3週間という短い期間ながら、異なる価値観や考え方をどん欲に吸収している。このプログラムの主旨は、マレーシアでの体験を通じて、アジアへの関心を高め、日本の将来を担う国際的人材を育成しようというもの。単なる語学研修ではなく、現地ですべての体験プログラムも組まれた。

全員がマレーシアははじめて。「マレーシアはいろいろな民族が交わり合っているというイメージだったが、来てみると、マレー系、中国系、インド系など、それぞれが干渉しない社会だと分かった」「アジアの中の日本という視点

が養われた」「アジアをもっと知る必要があると実感した」「これからはアジアの時代」など、異国で世界観の広がりを自覚している学生が多いようだ。

また、マレーシアの英語学習については、「アメリカではどうしても構えてしまうが、マレーシアでは失敗を恐れずにコミュニケーションができる」とアメリカに短期留学の経験がある学生は話し、「失敗が怖くないから、積極的になれる」と続ける。

最近話題にのぼる若者の海外旅行離れについて尋ねると、「海外に興味がある学生は実は多い」という答が返ってきた。「問題は資金、卒業単位、そしてやはり就職活動」と明かすとともに、「資金の面でいうと、マレーシアは学費も生活費も安いので留学しやすいのではないかと付け加えた。」

マレーシア観光大臣

「日本とマレーシアの交流ももっと盛んに」



城西国際大学の学生を前に観光産業の重要性を話すドクター・ン・イエン・イエン観光大臣

このたび城西国際大学から名誉博士号を授与されたマレーシアのドクター・ン・イエン・イエン観光大臣は、その記念講演のなかで、マレーシアの観光産業について言及。2020年までに海外からの旅行者を3,600万人にまで増やし、サービス経済大国への変換を図るとする目標を披露した。今年1~6月までの日本人旅行者数は215,872人。前年同期比で32.5%増加しているものの、世界では第9位のマーケットだ。「マレーシアは多民族で多宗教。アジアの縮図のような国だ。グリーンツーリズムからロングステイやラグジュアリーな旅行まで多様な体験ができる。最大のメリットは、物価が安く、あらゆるものが手頃な値段で手に入る。もっと日本からも来て欲しい」と話し、日本とマレーシアの交流が今後も発展していくことに期待感を表した。



マレーシア政府観光局

東京支局 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-6-4 千代田ビル5F TEL.03-3501-8691 FAX.03-3501-8692
大阪支局 〒550-0004 大阪市西区靫本町1-8-2 コットンニッセイビル10F TEL.06-6444-1220 FAX.06-6444-1380
ホームページアドレス www.tourismmalaysia.or.jp/